

フッガー家の公益活動と経営戦略

吉 森 賢

フッゲライ — 困窮者用集合住宅

南ドイツのミュンヘンから列車で30分程度の近郷アウクスブルクにあるフッゲライFuggereiは世界最古の困窮者用集合住宅とされ、約500年前の1514年から用地取得を開始、1516年から1523年にかけて建造された。1521年には財団設立案とも言うべき文書Stiftungsbrief（以下便宜上定款と称する）が策定され、これがフッゲライの公式完成期日とされる。この歴史的建造物が人口約27万人のこの小都市を世界的に有名にした。今日ドイツの生徒、学生、観光客はもちろん世界中から年間約18万人の有料見学者が来訪する^{1,2}。フッゲライは年中無休で見学可能なので一日平均約500人が訪れることになる。

フッガー家の末裔の一人である同財団の管理者責任者フォン・フント伯爵によれば、この住宅街は富裕ヤコブJakob der Reicheとして知られるヤコブ・フッガー（1459～1525、以下ヤコブ）により実現された。その目的はフッゲライ入口に嵌めこまれた三人の兄弟の名前によるラテン語の銘板に以下のように記されている：

「在アウクスブルクのフッガー家兄弟ウルリッヒ、ゲオルグ、ヤコブは当地に生まれたことを最大の喜びとし、その巨額の財産を至高・慈悲深い神により賜ったことに感謝し、ここに我らの信仰と寛容を垂範するために、正直であるが貧しい町民に106戸の住居と付帯建造物と設備を提供し、引渡し、捧げるものである」³。

その後増築された67棟140戸の住居には今日約150人が暮らしている。年間家賃は当時と同一の1ライン・グルデンであり、財団によればこれは今日の88セント約88円に相当する（1€＝100円とする）⁴。居室の状態は当時としては豪華に近く、個別の出入口があり、入居者の独立性が維持されている。有料制にした理由は入居者に引け目を感じさせない配慮とされる。入居条件はアウクスブルクの市民・住民であること、経済的困窮者であること、毎日3種の祈祷を

¹ 以下はStiftung, 2010, pp.64-65, およびFugger.deによる。

² *Augsburger Allgemeine*, 3. August 2010, www.augsburger-allgemeine.de/augsburg/Innovatives...

³ ドイツ語はHerre, pp.46-47による。

⁴ 以下簡便のため1グルデン＝88セント≒100円として換算する。グルデンとユーロの換算の根拠は明確ではないが、今日のフッガー銀行の資料にも使用されているので、信頼できるものと推定する。

行うこと、である。祈祷の一つはプロテスタントには無い聖母マリアに捧げる祈りであるので、実質的にはカトリック信者でなければならない。順番待ちの入居希望者は多いとされる。

この住宅街が今日に至るまで目に見える形で多くの困窮者により利用されてきた事実はドイツにおける企業の社会的責任の遂行意欲を誘う意味で重要な役割を果たしてきたと言えよう。それはドイツ基本法（憲法）第20条1項「ドイツ連邦共和国は民主的かつ社会的国家である」を具現した象徴とも言える。鉄鋼企業クルップの三代目所有者F-A.クルップの妻マルガレーテがエッセン市民のために現存する住宅街を建設した動機もフッゲライの影響ではなかろうか。フッゲライの著名な入居者には作曲家W.A.モーツァルトの曾祖父の左官工フランツがおり、その住居も特定され、入口の銘板には1681年から死去の93年まで住んだことが記されている。見学者用の説明書によればフランツは死刑執行人を埋葬したため、その後仕事が得られなくなり、極度の窮乏に陥り、フッゲライに入居したとある⁵。ひ孫のモーツァルトはこの街で演奏したことがあり、おそらくこの住居を訪れたであろう。

1. フッガー公益財団

今日フッゲライはフッガー侯爵・伯爵財団⁶に所属する財団の中で最も有名な公益財団により管理され維持されている。その他の財団は歴史的建造物・記念碑の保護活動、アウクスブルク大学との共同により科学賞の授与、老若音楽家によるコンサート、などの文化活動の支援を行う公益財団である。またフッゲライ居住者によるアウクスブルクの観光案内などのボランティア活動を実施する。

既述のフォン・フント氏によればフッガー財団の主要財産は土地、城などの不動産でありその90%は森林であり、その木材の販売による収入により慈善住宅が維持されている。森林からの収益率は低いが、過去252年間赤字になったことはない。これに対して戦時公債などを含むすべての流動資産は過去における戦争、国の経済破綻により消滅したとする。これらの不動産はヤコブとその後継者アントンにより王侯への融資の現物返済として取得したものである。その一例はヤコブがマクシミリアン皇帝の軍事費を融資し、その代償として得たバイエルン地区における数か所の領地と城がある。これによりヤコブとその承継者のアントンは貴族階級に参入し、今日に至るまでフッガー家の末裔は爵位を継承している。これらの不動産は上記の森林の形でフッガー財団の基本的財産を構成している。第二次大戦中連合軍による爆撃によりフッゲライ家屋の約半数が全壊・損傷を被ったが戦後同財団がこの森林収入により自力で修復した。

他の重要な収入源の一つはフッゲライや城の入場料などの観光収入である。また富裕者を顧客とする銀行⁷の他に、ビール醸造、レストランなどの事業に従事する。今日までこれらの不動産が存続し得た要因は第一にフッガー家の不動産が第三者への譲渡が禁止されていたこと、男子のみが相続権を有したこと、による。これにより幾代に渡る多数の相続者による不動産の散逸が防止された⁸。

今日フッガー財団は三家系が拠出する財産により設立され、それぞれの家長が代表者として

⁵ Die Fuggerei, pp.21-24.

⁶ Fürstlich und Gräfllich Fuggerische Stiftungen.

⁷ Fürst Fugger Privatbank.

⁸ Ehrenberg, p.186.

財団評議会としてフッガー家の長老評議会を構成し、重要な意思決定を行う。その下で財団理事会が財団目的であるフッゲライ、フッガー家設立の教会その他の管理、森林、城郭、居住用不動産、農業などの維持、管理にあたる。

2. フッゲライ設立の動機

2.1 利子取得の贖罪

ヤコブはなぜこの集合住宅を作ったのであろうか。上記のフッガー家の子孫によれば、当時のドイツでは善行を積みれば死後できるだけ早期に煉獄から天国へ行けると考えられていた。煉獄 Fegefeuer (fegen-罪を取り除く, Feuer-火により) とはカトリック神学によれば天国と地獄の中間にあり、生前に地獄に落ちる程の重罪ではない軽い罪を犯した死者が天国へ行くために清めの火による贖罪をするための一時的場所と説明される⁹。贖宥状の販売人として悪名高いドメニコ修道会の説教修士テツェルは「硬貨が金庫に落ちてチャリンと音がすれば魂は煉獄から天国へ飛んでいく」なる謳い文句で購買意欲を煽った。ルターは「95箇条の提題」の第26条でこれを謬説として次の27条で「硬貨が音をたてれば利得と貪欲が増すばかりだ」と批判した¹⁰。

当時のイタリアの裕福な商人の多くは勘定科目に「寄付口座」Spendekontoを設定しており、これへ債務者から入金した金利収入を記入し、これによりメディチ家のように芸術家を経済的に支援した。また教会側との交渉により融資に対して5%の金利を請求することを認めさせ、これを超える金利は教会および聖職者に同口座から支払われたという。これにより当時の大商人は現世においては事業について教会の恵みを、来世においては金利を得たことへの神の許しを得ることができたとされる。

エーレンベルクによればイタリアの中世の末期数百年においては有利子負債による金融取引は教会法の禁止にもかかわらず日常的に行われていた¹¹。その方式は金利に相当する金額を元金にあらかじめ含めたり、金利の代わりに名目を謝金などにしたり、貸手が欲する物品を利子分だけ安く提供し、あるいは借手が貸手から物品を利子分だけ上乘せした価格で買うなど多彩な方策が利用された¹²。しかし多くの商人は金利を取ることに良心の呵責を感じていたという。これが寄付口座を開設する一因であった。ヤコブは1510年以降アウクスブルクの守護神聖ウルリッヒの名義による口座を設置し、利益の一部をこれに振替へ、この基金により教会の新築、改善工事への寄進や献納を行い、フッゲライを建設した。

2.2 巨富への批判

しかしフッゲライ建造のより直接的な動機はフッガー家による高利貸、金利、独占行為などによる富の蓄積、とりわけローマ教皇による贖宥状の販売への関与に対する批判であった。大多数の民衆は飢餓の状況にあり、多くの貴族も奢侈とは程遠い生活水準にあったため富豪ヤコブの巨富は世論の大きな疑惑を招いた。

⁹ dtv Lexikon, 1990, Band 5, p.250. カトリック教ではPurgatoire, Hachette, 1980, p.1046-47. プロテスタントにおいては聖書に記述がないという理由によりこの概念は存在しない。

¹⁰ Bornkamm & Ebeling, p.30.

¹¹ Ehrenberg, pp.31-32.

¹² Ehrenberg, pp.33はこれら方策を表現するドイツ語、イタリア語、フランス語の例を挙げている。Herre, p.25.

彼と同時代人であるマルチン・ルターによるフッガー家に対する以下の糾弾は有名である：

「フッガーや類似の同族の口にも轡（くつわ）を咬ませねばならない。一代で王に等しいあれほど巨額の財産を築くことがどうして可能であり、神の教えと法に背かないのか。私にはその計算が分からない。100グルデンにより一年で20グルデンを儲け、1グルデンで同額さへ稼ぐ方法が私には分からない。しかもその方法は農作や牧畜によらないのである。神の喜び給うことは農業には精出し、商業は控えることである…そして聖書に従い土地を耕し、アダムが神に命じられたように“額に汗して汝のパンを得よ”を実行することである。まだ多く土地が開墾されず、耕作されてないのだ」¹³。

しかしヤコブ自身は非常に倹約家であり、その生活はつましかったとされる。その1カ月の生活費は会社の財務書類から判明しており、1498年39才で結婚するまでは月平均19グルデン（年約230グルデン）であり、時期的に違いがあるにせよ1520年頃の学校教員の年収156～208グルデンとの間に大差がない。したがってフッゲライの後述する総工費2万5千グルデンはヤコブの結婚前の年間生活費230グルデンの約100年分の生活費となる。なお手工業マイスターの年間収入は52グルデンであった。結婚後のヤコブの年間生活費は54（年650グルデン）、1501年からは87（年1040グルデン）、1505年からは225グルデン（年2700グルデン）へと業績と地位に相応して生活費が上昇している¹⁴。フッガーの財務情報は保守的であり、勘定項目の数値は実際よりも低く示されているとされる。これがヤコブの生活費の数字にどの程度の影響を与えているかは不明であるが、それほど贅沢をしているとは考えにくい¹⁵。

2.3 フッゲライ建設の決定

ヤコブは先鋭化する批判に対応すべく御用学者として人文学者に金を払い自らの事業を正当化させようと試みた。結果は不調であり、わずかの金のために心にもないことを主張する学者をフッガーは軽蔑するに至った。そして得られた結論がフッゲライであった。

フッゲライはヤコブが行った最善の投資であるとされる。フッゲライの建設費用は既述の「聖ウルリッヒ口座」への積立金1万グルデン、これに1万5千グルデンを追加し、総計2万5千グルデンを超えないと推定される。しかしその効果は以下に述べるフッガー家に対する批判を帳消しにするほどであった。フッゲライはドイツ国民の歴史と学校の教科書において不滅の地位を占めるに至ったからである。これによりフッガー家による悪しき行いは忘れられ、許された¹⁶。この総工費は後述の神聖ローマ帝国皇帝の選挙運動に際してヤコブがカール五世に用立てた選帝侯を買収するための費用54万グルデンに比較していかに僅かな投資であるかは明白である。

フッガー家の三人の兄弟出資者が所有する合計資本に対するフッゲライの建設費の比率はどの程度であろうか。フッゲライの定款が策定された1521年の貸借対照表は無いので6年後の1527年の数値によれば、資産総額が300万グルデンである¹⁷。これに対するフッゲライの建設費は比較年が6年異なるので厳密な比率とはいえないが、わずか1.2%に過ぎない。

¹³ Luther, 1520, in Bornkamm, 1995, pp.233-234.

¹⁴ Ogger, p.142.

¹⁵ Herre, p.45. 手工業マイスターは原文では週単位収入でありこれを年収に換算、他は年収。

¹⁶ Ogger, p.176.

¹⁷ Ehrenberg, pp.122-124.

今日多くの人々はフッガーと聞けばフッゲライを想起する。しかし贖宥状に象徴される腐敗したローマ教皇庁と聖職者、帝國皇帝・領主らとのフッガー家の癒着を知る人々は多くはないと思われる。これについて述べる前に以下にヤコブ・フッガーの人となり概観する。

3. フッガー家

フッガー家の創始者は織布工ハンス・フッガーであり、ヴェネチアから輸入したエジプト産木綿を地元産の麻と交織し、裏地は毛羽立ち加工したバルヘントと称する布地を織っていた。これは寝間着など日用衣料品に使用された。しかしハンスはただの職工ではなかった。彼はかなり早期に織布を作るよりもバルヘント布を売るほうが利益が大きいことを知り、織布工から製品の販売商人へ転職した。その商法はまずヴェネチアからエジプト原産の木綿を仕入れ、これを地元アウクスブルクの織布工に無償で支給してバルヘント布に加工させ、ハンスは加工賃のみを支払ってこれを仕入れ、ヴェネチアで販売する方式であった。これは経済史では前貸問屋制度Verlagssystemと称し、これを営む商人は前貸問屋Verlegerであり、ヨーロッパでは一般的に行われていた。この方式によりハンスは前貸問屋として織布工を競争させることにより加工賃を安くすることができ、売価も自由に決定できるので織布工よりも大きな利益を得ることができた。逆に織布工は原料の仕入れも販売も制限され、表面的には独立していながら問屋に隷属していた¹⁸。

商人ハンスはその鋭敏な企業家精神により商いに成功し、ツunftの有力者や市参事会員に昇進し、市の高級街の邸宅に引っ越すほどに豊かになった。これにより以下においてハンスをフッガー企業の創業者とする。

ハンスは二人の息子をもうけ、その一人は三代目ヤコブと同名のヤコブ・フッガー（以下二代目ヤコブ）である。この家系はその百合の家紋により「百合のフッガー」Fugger von der Lilieと称する。他方の息子アンドレアスの家紋は鹿であったので「鹿のフッガー」Fugger vom Rehと言われた。「鹿のフッガー」の家系は一時繁栄したが二代目の兄弟が破産し、その後の家系は不明である。

「百合のフッガー」の二代目ヤコブは父ハンスの事業をさらに拡大し、アウクスブルクの高額納税者の7位となった。ヤコブは男7人女4人の11人の子供に恵まれ、男子7人目の末弟に自分の名前と同名を与えた。これが三代目のヤコブであり、フッガー家の繁栄を頂点にまで実現した故に富豪ヤコブと称される。

二代目ヤコブの死後において3人の息子が早逝、一人が聖職者となったため残りの3人、すなわち長兄のウルリッヒ、6男ゲオルグ、そして末弟の富豪となるヤコブが合名会社の初期形態の出資者として家業を継続した。このヤコブは幼少時に聖職者となるべく育てられたが、本人はこの職業に就くことはなかった。その本領は後にフッガー家を繁栄に導いた企業家として発揮される。上記兄弟出資者はいずれも三代目であるが、この中で家業の発展への富豪ヤコブの貢献が圧倒的に大きいので、これを三代目とする（以下単にヤコブまたは三代目ヤコブ）。四代目はヤコブの甥のアントンである。

フッガー家は三代目ヤコブの事業戦略により1495年から死の1525年の30年間で驚異的發展を遂げた。その絶頂期はヤコブの晩年1511～1527年の17年間であり、財産である資本の成長率は

¹⁸ 大塚, pp.97-99.

927%, 年間成長率54.5%という経営成果を実現した。これは競争企業のウェルザーの16年間成長率142%, 年成長率9%に比較しても格段に大きい。死後四代目のアントン・フッガーの時代1546年においてもその資産は500万グルデンに達し一世紀以前の1440年イタリアのメディチ家のその5倍以上に達した¹⁹。

当時神聖ローマ帝国皇帝の選挙は1356年に神聖ローマ帝国皇帝カール四世が発布した金印(きんいん)勅書Goldene Bulleに基づき7人の選帝侯による選挙で決定された。これら7人はマインツ大司教, トリア大司教, ケルン大司教の3聖職諸侯とライン宮中伯(プファルツ選帝侯), ザクセン公, ブランデンブルク辺境伯, ボヘミア王の四世俗諸侯である。その際候補者は選帝侯に賄賂を支払うことが慣習化されていた。ヤコブはその巨額の選挙運動資金の貸付によりマクシミリアン一世, カール五世, フェルディナント一世の神聖ローマ皇帝への選任を実質的に決定できる程の政治力を発揮した。彼が皇帝決定者Kaisermacherと言われる所以である。また多くの領主, 王侯への融資と銀行業務を通じて絶大な影の影響力を有し, それはローマ教皇庁へも及んだ。16世紀ヨーロッパが「フッガーの世紀」Das Zeitalter der Fuggerとされる理由である。これによりアウクスブルクは発展し, ルターの協力者であるメラニヒトンをして次の言葉を言わしめた:「アウクスブルクはドイツのフィレンツェであり, フッガーはドイツのメディチに比肩する」²⁰。

4. 富豪ヤコブ・フッガーの修行体験

1473年14才のヤコブはヴェネチアの拠点で見聞を広め, その最先端の簿記や貿易, 金融業務などにおける商業技術を習得する機会を兄弟から与えられた。ルカ・パチョーリが1494年複式簿記の祖と言われるスルマを発刊する6年前である。この修行は当時のアウクスブルク, ニュルンベルク, ウルムの裕福な商家には一般的な慣行であった。当時のヴェネチアは「アドリア海の女王」として地中海貿易, 金融の中心地であり, ヨーロッパ主要国のすべての通商経路の出発地点であり, 終着地点でもあった。ヤコブが滞在した1470年代のヴェネチアには44行の銀行があり, 77人の金細工業者, 1万6千人の絹, 木綿, 羊毛の織物工が働いていた²¹。ヤコブはヴェネチアの商人達がいかに短時間で, 能率的に, 大規模な取引が行うのかを学ぶ事ができた。後にフッゲライに教会を建造した際にその日時計に「時間を有効に使え」Nütze die Zeitなる家訓をしるしたのはこの折の経験であろうか。この時間感覚の表現はルネッサンスの一特質とされる。

これらヴェネチアの銀行は支店からの情報を集めた私的情報紙lettere privateを編集し本支店間での共有と主要顧客への提供を行った。これはヤコブが始めた「フッガー新聞」Fuggerzeitungのモデルとなった²²。

1478年ヤコブは5年の修業の後19才でアウクスブルクの本店に帰還した。彼のヴェネチア修行の成果は彼のその後の成功の過程により明らかである。彼にとって最も重要な教訓の一つはフィレンツェにおける二つの時期における巨大銀行の創業, 発展, 衰退, 崩壊の過程であろう。フィレンツェはヤコブがヴェネチアに滞在する前に二回の浮沈を繰り返す。その一つは以下に

¹⁹ Ehrenberg, pp.388-389.

²⁰ Herre, p. 18.

²¹ Herre, p. 20.

²² Herre, p.7.

示す三大銀行の、他の一つはメディチ銀行の興亡である。これらはいずれもイタリアはもちろんロンドン、パリ、アヴィニョン、ブルージュなどの主要商業都市に支店を設置していた。国際的取引の拡大に伴い支店網の拡大が不可欠となり、フッガーもこれに倣い支店、代理店網の拡大に務めた。

これらフィレンツェの国際的銀行は全て倒産した。まず最初に生じた三大銀行の事例を概観する。

4.1 三大銀行バルディ、ペルッツィ、アチャイウォリの興亡

一三世紀前半からフィレンツェは教皇グレゴリウス二世とドイツ・ホーエンシュタウフェン家の皇帝フリードリヒ二世との深刻な対立により教皇派と皇帝派に分裂していた。その後フリードリヒは病死し、息子のマンフレートは1266年南下する教皇派のフランス・アンジュー家のシャルルとの戦いに敗れた。シャルルの勝利に教皇派のフィレンツェの商人達による戦費負担が大きく貢献した。これによりシャルルは教皇によりカルロー一世としてシチリア王国、教皇領、フランス王国、イギリス王国など広大なキリスト教国における教会税の徴税人としての地位が与えられた。これは遠隔地からローマへの送金を必要とするために上記の国際的な支店網を有する三大銀行の発展をさらに促進した。その後これらによる国王・諸侯への貸付業務は商業特権をもたらし、フィレンツェの金融業、商業、毛織物工業が発展し、資本主義の揺籃となるほどに繁栄する経済都市に発展した²³。

バルディ Bardi, ペルッツィ Peruzzi, アチャイウォリ Acciaiuoli²⁴などのフィレンツェの大銀行は上述の背景のもとで繁栄したが、ペルッツィとアチャイウォリ両銀行は1343年、バルディは1346年に倒産した。その最大原因は1337年フランスとの100年戦争の開始に先立ちイギリスのエドワード三世に対してなされた過大貸付けの回収不能である。この貸付額はバルディが90万フローリン、ペルッツィが60万フローリンであった。両者を合わせた金額は「王国をも買える」ほどであったとされる。二行の自己資金はそれぞれ10万フローリン程度であり、貸付金のほとんどは同族外部のイタリア内外の預金者の預金であった²⁵。そもそもこの戦争はイギリス国内での増税反対のため戦費のあてのない状況で開始された。

その後フィレンツェは衰退し、復興はメディチ家の時代まで待たねばならなかった。

4.2 メディチ家の興亡

これはヤコブのヴェネチア滞在中と帰国後においても目のあたりに展開された崩壊の最終過程である。それは彼に政治に関与することの危険を教える絶好の事例研究であった。メディチ銀行はジョヴァンニ・ディ・ピッチ・デ・メディチ（1360年-1429年）が1397年創立し、ほぼ一世紀にわたる同家の繁栄の基礎を築いた。1400年において同銀行はヨーロッパの主要都市に支店を設立していた。創業者デ・ピッチは死を前に息子のコジモに「目立たず暮らす」なる趣旨の家訓を残した。二代目コジモはメディチ銀行を規模と収益性においてヨーロッパ最大の銀行へ発展させた。しかしコジモはその富に基づきフィレンツェ共和国の政治的権力を独占するに至った。父の家訓に背き、銀行経営と政治家としての二足の草鞋を履くことにより銀行衰退の

²³ 齋藤, pp.192-193.

²⁴ 発音表記は次による: Duden, 2005.

²⁵ Renouard, p.158. これら倒産については清水, pp.135-142に詳しい。

種は蒔かれ、それから二度と回復することはなかった。

三代目のピエロは痛風病みの虚弱体質で父からの政治的、銀行の地位を相続したが1464年からわずか5年の在任の後に短命の生涯を終えた。

四代目はピエロの息子ロレンツォが相続し、イル・マニフィコ（豪華王）と称し、芸術家、作家などへの多大な経済的支援によりフィレンツェの文芸を世界的に著名にしたが、既に銀行は破綻状態にあり、ロレンツォは国の資金を横領するほどに落ちぶれた。

最後の五代目ピエロ・アルフォンシーナはサッカーが得意なだけの「愚昧」のあだ名が与えられ、フランス軍の侵入を前に馬で敵前逃亡した。創立100周年まで4年を残す1494年メディチ銀行の資産はすべて差し押さえられ、メディチ邸は民衆の略奪に任された。

以上のフィレンツェの大商人・銀行家の衰退は王侯への貸付がいかに大きなリスクを伴うかをヤコブに教えたに違いない。

5. 地理的・政治的背景

以下のヤコブによる事業活動を理解するためにアウクスブルクとヴェネチアとの地理的關係と交易、前期資本主義の揺籃の地としてのイタリアの経済的諸制度、そしてドイツの政治・経済的環境として神聖ローマ帝国の実態を把握する必要がある。

5.1 地理的背景—ヴェネチアとの近接

南ドイツのアウクスブルクはニュルンベルクと共にドイツの都市の中でヴェネチアに最も近く、このための両都市間の交易は12世紀以来盛んであった。15世紀当時アウクスブルクからヴェネチアまでは二つの陸路があり、一つはインスブルック、ブレナー峠を経由する520km（下街道die untere Straße）、他はより遠いフュッセン、ボーツェン、トレント経由の620km（上街道die obere Straße）であった。前者が圧倒的に多く利用され、1430年には6500台の貨物馬車が利用したが後者はわずか700であった。日数は騎馬では最速10日、貨物馬車では1日30～40kmが走行距離であった。

南ドイツとヴェネチア間の交易が盛んであったことは既に1228年に下記のドイツ商館がヴェネチアに建設された事実で明らかである。フッガー一族の本拠地アウクスブルクからヴェネチアへはインスブルックとブレナー峠を経由して亜麻布、羊毛、毛皮、塩、銅、銀、鉄製品、などが輸出され、ヴェネチアからの輸入品は中近東・インドの香辛料、絹製品、ヴェネチアのガラス製品、フィレンツェの革製品、シチリアの砂糖、北部イタリアの果物（石榴、レモン、無花果など）、チーズ、貴金属、東方の絨毯などであった。

上記の「ドイツ商館」Fondaco dei Tedeschiはヴェネチア政府により設置されたドイツ人商人専用の公的施設であり、ゴンドラ漕ぎはヴェネチアに到着する全てのドイツ商人をここに強制的に移送することが法的に義務づけられていた。ここでドイツ人商人は宿泊し、商品を保管・展示し、商談を行い、即売した。また政府はここで通関手続きを行い、ドイツ商人が持ち込んだ商品に対する関税を徴収した。商館の56室ではヴェネチアの役人の監視の下で商談が行われ、その売上金はすべてヴェネチアで商品買い付けに使用されねばならなかった。商館は商品を陳列し即売するための80の店舗施設Handelsgewölbeと倉庫が一階にあり、上階には応接室、事務室があり有力な商人は長期に渡り部屋を確保することが可能であった。フッガー家も1484年一

部屋、5年後には二部屋を確保した。トルコその他の国々も同様の商館を有していたが、ドイツ商館の規模が最大であった。これは当時も今日でも一等地の一つともされるリアルト橋のたもとにある。

ドイツ商館は1797年ヴェネチアがナポレオンによる占領、その後はオーストリアへの併合によりその役割を終えた。その後商館の建物は最近の2011年までヴェネチア中央郵便局として利用されたが、2008年に衣料品のベネトン社へ売却された。同社はこれをショッピングセンター兼展示場へ改装しようとしたが、ヴェネチア住民の反対により政府当局が「非歴史的」としてこれを認めなかった²⁶。

5.2 政治的背景 一神聖ローマ帝国

プロイセン王フリードリヒ二世によりベルリンに招聘され、王と10年にわたり文通を交わしたヴォルテールによれば「過去に神聖ローマ帝国と称し、今日なおこの名を冠する統治体は神聖でも、ローマでも、帝国でもない ni saint, ni romain, ni empire²⁷」。これはフッガーとルターの時代における神聖ローマ帝国の性格を的確に表現していると言えよう。まず「神聖でもない」理由は以下である。この時代においてローマ教皇庁は神聖の性格を失い、ルターが「昔のソドムやゴモラ、あるいはバビロンよりもはるかに邪悪、醜悪²⁸と形容されるほどに墮落していた。ルターによる宗教改革の発端となった贖宥状の販売はその顕著な一端ではあるが、氷山の一角に過ぎない。また既述のように利子を禁止する教会法は形骸化し、教皇庁の最上層部の枢機卿²⁹でさえヤコブの銀行口座に確定利付の預金をする状態であった。これらについては後述する。ルターが1510年初めてローマを訪れた際に目にしたのはこのような高位聖職者の腐敗と墮落であった。

教皇庁の外見は教会であるが実態は絶対的な権力を有する世俗権力の封建王侯と変わるところはなく、政治的、経済的そして軍事的にも一大勢力であった。これによりローマ教皇はカトリックの総本山として全ヨーロッパの領主の上に君臨していた。ルターによる改革はこのような教皇の聖俗混交を打破し、教会は世俗権力を捨て、純粋に聖の世界に留まるべきとする改革であった。

次に「帝国でもない」も事実であり、神聖ローマ帝国には中央政府は存在せず、7人の選帝侯と多数の領邦が主権を有する独立した国家の集合体に過ぎなかった。これら領邦はそれぞれ高等裁判権、鋳造権、関税権、課税権、立法権、貨幣鑄造権などを有し、この分権的性格は1806年まで継続した。ヤコブもこれらの諸侯の権力と特権を利用することによってしか主力事業である金融・銀行事業そして銀・銅鋳山の採掘、精錬においても従事できなかった。すなわちフッガー一族は言わば体制側にあつたのである。このことは既述のようにルターによるフッガー家の富に対する批判と攻撃により明らかである。

ルターによればこの教皇庁に起因する「全キリスト教界の墮落」はそれにより巧妙に築かれた三つの「城壁」に起因するとされる。第一は世俗権力がローマ教皇に従属すること、第二は

²⁶ Herre, p.14, http://de.wikipedia.org/wiki/Fondaco_dei_Tedeschi, 齋藤, pp.337-338.

²⁷ Voltaire, p. 416. "Ce corps qui s'appellait et qui s'appelle encore le saint empire romain n'était en aucune manière ni saint, ni romain, ni empire".

²⁸ 「教皇レオ十世に奉る書」 p.332.

²⁹ カトリック教会の聖職位階は教皇を頂点に降順に枢機卿、総大司教、大司教、司教、司祭、信徒である。シオヴァロ他, p.176.

聖書の解釈はローマ教皇のみが決定すること、第三は公会議の招集決定権はローマ教皇にあること、である³⁰。

しかしルターでさえ「10分の1が金利のなかでは最善であり、この世の初めから用いられてきたのであり、古い掟の中で神の掟と自然の法に従った最も公正なものと賞賛され、認められてきたものである」とし、適切な金利は10%と述べている³¹。この点ではルターはかなり現実的であり、カルヴァンによる金利肯定につながると言えよう。

6. 商業技術

6.1 銀行と金融機能

フィレンツェが銀行の発祥地であることは周知である。初期のイタリアの銀行家は広場や大道で椅子banquiに座り、業務を行い、破産すると椅子を壊しbanca rotta, bankruptの語源となったことも知られている。イタリアの影響は今日のドイツ語の口座Konto, 振替Giro, 当座預金Girokontoなどにも現れている。またフッガーの代理店を意味するドイツ語Faktoreiはイタリア語のfattoriaに由来する。

国際的金融取引の源泉は11世紀からヨーロッパの商都で開催された大市であった。とりわけフランスのシャンパーニュの大市はヨーロッパ最大の遠隔商業の中心地となった。当初は東西ヨーロッパを結ぶ遠隔地交易がその中心的役割であり、フランドルからの毛織物をイタリア商人が仕入れ、これがジェノアを通じて近東諸国へ輸出され、代わりに絹織物、香辛料などが輸入され、ブルージュを経て北欧に輸出された。このようなヨーロッパ東西の国際取引の決済に伴い両替、為替、手形、信用状などの技術が生まれた。その後大市の性格は変化し13世紀半ばには金融取引が商品取引よりも重要となった。シャンパーニュの大市は外国為替市場となり、国際的投機の対象となるに至った。

このようにして1200年までにはイタリアのほぼ全土にわたり両替商が単に内国・外国通貨の両替業務のみならず、今日の銀行の機能を提供していた³²。最も重要な機能は現金による支払い・受取の代わりに銀行口座への記帳により決済する振替業務であった。すなわち預金口座所有者が送金する場合、自ら銀行に行き、口頭で送金額と受取人を銀行員に伝え、銀行が作成した振替指図書により送金が行われた。また当座預金所有者には預金額を超過する当座貸越契約も提供され、その利用は稀ではなかった。これにより多数の顧客との支払い・受取や本店・支店間の資金の移動などが現金により行う必要がなく、現金輸送に伴う危険と手間が大きく軽減された。

次に定期預金と当座預金の開設、顧客への貸付である。とりわけ教皇庁や内外の王侯貴族を顧客とする大銀行banqui grossiには預金が集中し、これにより銀行は国内外との金融取引、とりわけ王侯貴族への貸し付けを行った。

6.2 アラビア数字と複式簿記

大銀行・商事会社としてフッガー家はアウクスブルクの本店を頂点として全ヨーロッパに主要支店としてローマ、ヴェネチア、アントヴェルベンなど6カ所、支店はミラノ、リスボン、

³⁰ Luther, pp.154-167.

³¹ ルター, 1524, p.574.

³² 以下五十嵐, pp.239-245による。

マドリッド、フランクフルト、ウィーン、ブダペストなど16カ所、代理店その他60カ所、計80拠点を擁するに至った³³。これはメディチ銀行の6支店³⁴を大きく上回る。

このように多数の国内、国外の支店、代理店の業務を統括し管理するためにはこれらによるアウクスブルク本店への会計報告が統一された基準により作成されねばならない。このためにはイタリア固有のローマ数字は数字文字の組合せであり、複雑な取引関係の数字による記録には不適格であった。そこでインド発祥、アラビアで改良された十進法によるアラビア数字が1202年数学者のイタリアのレオナルド・ピーサ、別名フィナボッチによる「アバクスの書」Liber abaciにより導入された。新数字は改ざんの可能性が高いと言う理由により裁判所では認められず、ローマ数字のみが有効とされた。しかしアラビア数字の普及はその後全ヨーロッパに及んだ。

アラビア数字の導入により発達した会計情報の記録技術は複式簿記である。ルカ・パチョーリによる簿記の最古の本が発行されたのは1494年であった。しかしこれは一つの学説であり、他に三種の起源説がある。最も古い説はフィレンツェを元祖とする13世紀起源説であり、次にジェノヴァ起源の14世紀の説、15世紀に5年足りないミラノ説、そして15世紀のヴェネチア説である³⁵。いずれにせよ14世紀のイタリアが複式簿記の元祖であることに違いがない。これらの都市はいずれも商業、工業が発展した都市であり、企業による取引規模の拡大により、出資者が一定期間における企業の経営成果を認識し、評価するための正確な資料への要求が高まった。これが複式簿記発展の大きな背景である。

今日の複式簿記においてはすべての取引がその二面性と等価性により借方と貸方の二回にわたり記入される。次にこれらは元帳の該当勘定科目に転記される。これらは一定期間の終わりに残高試算表を経て最終的に同期間における利益・損失の状態と原因を示す損益計算書が作成され、これと同額の利益・損失が貸借対照表の資本の項目に反映され、一定時点における出資者の財産・資産状態が把握可能となる。複式簿記はその自動検証能力によりその後オランダを経てイギリスに渡る。この会計技術と次の銀行の誕生によりイタリアが近代資本主義の発祥地とされる。

7. 企業家ヤコブの事業戦略

1479年ヴェネチアでの修行を終え本店への帰任後にヤコブが最初実行したことは国外の全ての支店を騎馬で訪問し、各支店の有力顧客と面談することであった。これによりヤコブは本店、国内・国外の支店の実態をも把握した。また出資者兄弟二人の同意を得てヴェネチアで習得した複式簿記の記帳方式を更に改善した独自の会計制度を導入し、多数の支店、代理店の業績、財務状況を一覧により把握できるようにした。

これによりヤコブは戦略的意思決定に精力を集中することができた。事業戦略としては以下の三分野が推進されることになった。第一は創業以来のヴェネチアとの交易であり、伝統的な商品の他に新たに以下の銀、銅の金属地金の輸出が増加した。これらは従来の繊維などの伝統的商品と比較して利益率が高く主要な輸出商品となった。

³³ 諸田, pp.40-41.

³⁴ 五十嵐, p.259.

³⁵ 石川, 齋藤, pp.13-14.

第二の新事業は銀行・金融事業、とりわけ大規模な資金貸付事業である。そしてこれと密接に関連する第三の事業が鉱山事業であり、銀と銅の採掘と精錬、そしてこれら地金のヴェネチア市場における販売であった。

7.1 銀行・金融事業

1) ローマ教皇庁との金融業務

フッガー家が公式にアウクスブルクの公文書により銀行として認められたのは1486年であった。しかし同家は既に1476年スウェーデンからローマ教皇への振替送金を皮切りに教皇庁との銀行業務に従事していた。当時教皇庁と金融取引関係にあった銀行はイタリアの40行のみであった。その後フッガー銀行が教皇の信頼を得るに及び、外国銀行としてはフッガー銀行のみが取引を許された。フッガー家にとっては銀行、金融事業は交易、鉱山と共に三つ目の重要な事業部門へ発展する。その最も重要な業務はドイツ、北欧、東欧の聖職者が上位階層に昇任する際に聖職禄などの名目で教皇へ支払う献納金Servitiaの送金業務であった。

当時は教会税が存在しなかったため、聖職者の生活費は信者の喜捨に依存した。教皇は全キリスト教国において高位の聖職者に一定地域の教徒に喜捨を要請する権利を与える代わりに、その全額の一部を教皇庁に支払う義務を負わせた。その支払額は喜捨の予想額に従い細かく階層化されていた。フッガーがヨーロッパの主要都市に設置した多数の支店網による振替送金はこれら高位の顧客にとって不可欠の送金手段であった。またフッガーは教皇庁の硬貨鑄造にも従事した。

今日のヴァチカンの観光客にとって興味ある事実はミケランジェロの意匠とされる制服を着用するサン・ピエトロ寺院の衛兵がフッガー銀行による5000グルデンの貸しつけにより実現したことである。この資金は1505年150人のスイス人衛兵がローマまで700 kmを3週間徒歩による移動費用として使用された。2006年教皇庁は衛兵隊創立500周年を記念する行事を催したが、これにはフッガー家の子孫も招待された³⁶。

2) 教皇庁、上位聖職者、王侯の資金運用業務

既述のように高位聖職者による資産運用はかなり一般化していた。もちろんこのことは今日のスイスの銀行と同様に秘密であった。これらの名前は今日判明しており、一人は以下のメッカウ、他にアレッサンドリノ、サントリの枢機卿の司教、師などである³⁷。南ティロルのブリクセン（今日のイタリア領プレサノーネ）の領主司教のメッカウはローマ教皇庁の要職を経て司教となった有力者であった。所領の鉱山資源により彼は裕福であり、ヤコブの大口預金者であった。その死亡時において預金残高は30万グルデンに達した³⁸。それは教会法による利子の禁止が形骸化していたことをも物語る。フッガーにとってはこの種の秘密預金は帳簿には現れず、長期にわたり維持されるため、他人資本として利用することができた。

しかしメッカウの死後この預金残高が教皇に知れるに及び、彼がその所有権を主張した。これはフッガーにとっては死活問題であった。その預金は既に様々な貸付に利用されていたために直ちには現金化できないからである。しかし突然メッカウの遺書が紛失したことでフッガー

³⁶ Kluger, p.23.

³⁷ 諸田, p.68.

³⁸ Ogger, p.136.

はそのまま預金を保持し続けることができた。

3) 神聖ローマ帝国皇帝の選挙運動資金の融資

既述のように当時の神聖ローマ帝国において皇帝は3人の大司教、4人の世俗諸侯の7人の選帝侯による過半数の賛成投票により選任された。マクシミリアン一世皇帝の後継者の選挙に際しては、二人の有力な候補者がその地位を争うことになった。一人はマクシミリアンの孫であり、スペイン王であるハプスブルグ家出身でスペイン王カルロス一世、他の候補者はフランス王フランソワ一世であった。しかし選帝侯らは支持の代償として賄賂を要求した。その額は両者の選挙戦が激しくなるにつれ上昇し続け、莫大な金額に達した。それはいずれの候補者が自己資金で調達できる限度をはるかに超えた。このためそれぞれは豪商から借入れざるを得なくなったが、商人と雖もこの要請に応えられる者はヤコブをおいてなかった。ヤコブは両者から協力を要請されたが、カルロスの祖父であるマクシミリアン皇帝との取引関係を重視し、これを支援した結果1519年カルロスが選帝侯の全会一致により皇帝に選任されカール五世として即位した。

カールが選帝侯とその顧問に支払った選挙費用の総額は85万2千グルデンに達し、その64%、54万4千グルデンをヤコブが負担した³⁹。当時下層市民一家族の年間生活費は50グルデンと推定されており、この選挙費用総額は1万7千家族の年間生活費に相当した。ヤコブの調達した選挙費用はその後金利その他を追加して60万グルデンとすることがカール皇帝と同意され、40万はティロル鉱山の収入から、20万はスペインの収入から支払われることになった。

4) 贖宥状販売の送金・管理業務

フッガーは1500年から開始された贖宥状の販売に際して教皇庁の代理人テツェルと同行し、ローマ支店を通じて教皇へ売上金を送金する業務を担当した。テツェルの贖宥状販売の一行にはフッガー家の代表一人が必ず同行した。その役割は金庫が売上金の硬貨で満杯になるとフッガー代表者が保持する鍵で金庫を開け、売上金の計算、記録、報告書を作成し、売上金はフッガーのローマ支店を通じてローマ教皇へ届けられた。フッガーにとっての利益は次の例により説明される。

新任のメインツ大司教アルブレヒトには教皇庁の規定により、教皇による正式任命と法衣を授与されるために献納金3万ドゥカートを支払う義務が生じた。このためアルブレヒトはフッガーからその7割である2万1千ドゥカート⁴⁰を借りた。フッガーは売上金半分はローマ支店を通じて教皇へ届け、残りの半分は貸付の返済金として確保した。したがってヤコブにとって贖宥状はこの種の貸付金を迅速かつ確実に回収するための有利な手段であった。なおこの金利に相当する対価は当時「手数・危険・費用」の名称で婉曲に表現され、その額は500グルデン、利率約2.3%であった。

7.2 鉱山事業

1485年26才のヤコブはフッガー家にとって最重要拠点であったティロルのインスブルック支社支配人として全般経営を担当することになった。同地はヴェネチアへの街道の主要中継地点

³⁹ 諸田, p.41.

⁴⁰ 1 Dukaten=1 Gulden = 1 Florin, 渡辺, 1981, p.484参照.

であり、それ以上にヨーロッパ有数の銀、金、銅の鉱山所在地であった。金印勅書により神聖ローマ帝国においては選帝侯および帝国諸侯が鉱山の採掘と金属の加工・販売の鉱業特権Bergregalを高等裁判権、関税権、貨幣鑄造権と共に有していた。

多くの諸侯は奢侈、戦役・軍事費、行政費用の増大などにより財政的窮乏に陥っていた。したがってこれらは商人による融資を必要としていた。ヤコブは王侯領主を対象として貸し付けを行い、返済を銀と銅の地金で得る事業への進出を決断する。銀は数世紀来国際的取引の通貨であり、ヴェネチアにおいて東方からの香辛料その他の商品の決済のための貨幣として旺盛な需要があった。銅は銅製大砲の材料としてその需要は急速に増加しつつあった。それはやかんやポットなどの家庭用品などにも利用された。

ヤコブにとって最初の重要な顧客は銀・銅鉱山の中心地ティロル地方を支配するジクムント⁴¹大公であった。大公には40人の婚外の子供がいるなど放蕩・享樂的性格でその欲求を満たすためなら出費を惜しまなかったためインスブルックの宮廷財政は常に逼迫していた。おそらく借金返済の源泉としての豊富な銀、銅の金属の鉱山がその一因であったのであろう。ヤコブは彼に貸付を行い、元金の返済は融資額に相当する量の銀・銅の採掘、精錬、販売の特権を譲渡させる形で確保した。採掘、精錬はそれぞれ鉱夫が行い、ヤコブはこれらから地金を仕入れ、ヴェネチアで売却し、大きな利益を確保した。その方法の詳細については後述する。

1) 銀の採掘・精錬、販売

既述のように金印勅書の規定によりインスブルック領主のジクムントがティロルの鉱山の独占的採掘特権を有していた。実際に坑道で採掘に従事するのは独立した複数の鉱夫であり、これらは今日の株式会社の株式に相当する持分Kuxeに出資して採鉱会社Gewerkeの出資者として採掘に伴う大きなリスクと損失を出資分に応じて負担し、利益が出た場合はその配分を得た。そのリスクとは作業中の事故と鉱脈の予測が外れた場合のリスクであった。鉱脈の存在予測が的中した場合はジクムントが銀1重量マルク(281グラム)につき事前に合意された価格8グルデンで買取る独占的優先権を有し、その中からジクムントは5グルデンを採鉱会社へ支払い、3グルデンは自己の利益とした。これを領主の有する先買権Vorkaufsrechtと称し、銀のみならず銅などのすべての金属にも適用された。この5グルデンは鉱石を溶融・精錬し最終製品としての地金に得るための原価である。

1485年ヤコブはジクムント大公への3000グルデンの貸付により銀を対象とする事業へ進出した。その返済方法はジクムントがその先買権をフッガーへ譲渡することにより行われた。これはその後の返済方法として定着した。すなわちフッガーが銀1重量マルクを8グルデンで買い、その中から5グルデンを採鉱会社へ支払い、残り3グルデンは返済金の一部支払いとして受領する。したがって3000グルデンの返済のためにはジクムントが1000重量マルク(281kg)=8000グルデンの銀の先買権をフッガーに譲渡すればよいことになる。これによりフッガーは貸付金3000グルデンを回収し、採鉱会社へ5000グルデンを支払う。この5000グルデンを281kgの銀の仕入原価とすれば、これ以上の価格でフッガーがヴェネチアの市場で売却すれば利益が生じる。売却価格については調べた範囲では明らかでないが後述するようにその利益率は大きい。

次の融資の機会が生じた。ジクムントがヴェネチアによる鉱山進出を阻止するためにそのヴェネチア領内の鉛の生産工場を差し押さえた。これによりヴェネチアとの関係が緊張し、ヴェネ

⁴¹ ジギスムントSigismundとも称するが本論ではジクムントSiegmondに統一する。Mckensen, p.158.

チアはその損害補償を求めたがジクムントは動じなかった。ヴェネチアは開戦を通告してきたが、ドイツ側の商人らは敗戦の場合に銀鉱山がヴェネチアにより奪取されることを恐れた。このためジクムントはヴェネチアが求める損害補償金10万グルデンを支払うことに同意した。

ヤコブはジクムントに既存の貸付に加えこの賠償金支払いのために競争企業を上回る合計15万グルデンを融資した。ヤコブは融資契約書にジクムントのみならずその側近高官にも返済責任を負わせ、それぞれに署名させた。次にヤコブは債務返済を更に確実にするために、保証人としてティロルで最も裕福な鉱山持分所有者を連帯保証人として借用契約書に署名することに同意させた。すなわちティロル領主としてジクムントが債務不履行に陥った場合は、ヤコブがティロルの全ての銀鉱山を支配することができるようにしたのである。

ヤコブによる資金注入によりティロル行政府の高官、廷臣、兵隊に至るまで給料を定日に必ず受け取る事ができるようになり、ヤコブに協力を拒むものはいなかった。このようにして1488年終りにおいてヤコブはティロルの影の支配者となった⁴²。

次の標的は当時大公の許可によりヴェネチア向けの銀を採掘していたザルツブルク・アルプスの零細資本の企業であった。ヤコブはまずこれらの資本の一部を取得するという方式により資金支援を行った。ヤコブは次第にこれら企業の信頼を得るようになり、その出資額をも増やし続けた。その出資額がかなりの額に達した段階で、ヤコブは鉱山所有者にヤコブが銀を独占的にヴェネチアへ輸送し、販売する権利を請求し、実現させた。

1490年ジクムントはマクシミリアン一世が同席した会議で行政官僚ら財政破綻の責任を追求され、辞職させられた。その後マクシミリアン一世がその後継者となり、ジクムントの負債を全て引き継ぐことを約束し、返済を実行した。93年神聖ローマ帝国皇帝に就任するとマクシミリアン一世の領土拡大の一連の戦役によりこれへのフッガーの貸付はさらに増加すると共に利益も増大した。

貸付金の返済を銀の採掘権の譲渡により確保する上記の方式によるフッガーの利益はヤンゼンによれば極めて高い。それによれば1487年から1494年までの7年間ヤコブがジクムントとマクシミリアン皇帝に貸し付けた総額62万4千88グルデンに対して受領した銀20万重量マルクの売却利益は40万グルデンに達したと推計している⁴³。この差を金利とすればそれは実に64%の高率となる。この金融取引はドイツの文献では一般に貸付Darlehenとされるが、これは実態と矛盾する。そもそもこの貸付には利子率の規定がない。また実態と収益率からも利子率の規定は不要であった。したがってこれは貸付ではなく、フッガーによる貸付の形式による銀への投資と理解すべきであろう。そしてこの高収益の背景はこの時期のヨーロッパにおける銀需要の急上昇が指摘される⁴⁴。

2) 銅の採掘・精錬・販売

既述のように銅の需要はとりわけ大砲の生産拡大により増大しつつあった。その需要は銀に次ぐほどであった。銅鉱石はティロル地方においても産出されたが、ここは既に競争企業により支配されていた。このためヤコブは古くからドイツ人が採掘に従事と言われていたポーランドとハンガリー両王国の境界、クラカウ、ブリュン、オフエン（今日のブダペスト）の三

⁴² Ogger, pp.59-61.

⁴³ Jansen, pp.56-57, Häberlein, p.41, Herre, pp.28-29.

⁴⁴ Häberlein, p.41.

角地帯の銅鉱山に注目した。当時坑道の掘進作業中に地下水脈を不用意に掘ったために多数の鉱夫が溺死する事故が多発し、その坑道は水没のまま放置されていた。鉱山技術者のヨハン・トゥルツォはこの坑道を排水し、再び採掘を可能にするための実証済みの技術を有していた。さらにそれまでは銅を含む鉛鉱石を溶解し、その後に銅を分離していたが、トゥルツォは鉛鉱石から直接に銅を分離する技術を開発していた。ヤコブはヨーロッパの銅鉱山を独占することを意図していたので、これらの技術の重要性を高く評価した。ヤコブはトゥルツォの出資分をその技術を現物出資として負担し、折半出資による合弁会社とも言うべき「ハンガリー共同商会」*der Gemeine Ungarische Handel*を設立し、トゥルツォに経営活動をも任せた。

これによりヤコブはトゥルツォの名義でハンガリー中の銅鉱山を買い占めさせた。トゥルツォはヤコブが期待した通りの技術的成果を実現し、これらから産出する銅鉱石の溶解炉を3個所に増設した。これにより銅錫の合金としての真鍮、そして銅製の大砲をも製作するに至った。これはおそらくフッガーによる唯一の垂直川下統合であろう。ヴィラッハVillachは今日ユーゴと国境を接するオーストリアの都市であり、1495年ヤコブは溶解炉の近くにフッガー一家最初の城を建設し、これをフッゲラウFuggerauと命名した。これは同地区の銅鉱山、溶解炉そして大砲など最終製品に至るまでの全事業の統括本部としての機能を果たした。今日この城は廃墟となっているが、塔が残っている。

このトゥルツォとの共同事業によりフッガーは150万グルデンの純利益を実現したとされる⁴⁵。

その他フッガーは銀と銅を分離するために必要とされる鉛を南ティロルで採掘した。また金と銀の分離のために必要な水銀の鉱山をスペインで賃借した。水銀はその他の用途として鏡や梅毒の治療薬などに利用された。

8. ヤコブの公益事業開始

1516年50才に達したヤコブの顔には深い皺が刻まれその風貌は75才のそれであった。それまで一日16時間働き、すべての細事にわたり計画、経営してきたヤコブは功成り名を遂げ、経営業務の協力者を探し始めた。このため採用した人物は19才のマテウス・シュワルツであった。ヤコブはこの青年の態度、物腰と簿記の技能が気に入り、1517年これをHauptbuchhalter最高会計責任者に任命した。実質的には今日流の言葉で表現すれば最高財務責任者ないし副社長に相当する責任と権限に相当すると言えよう。シュワルツによればヤコブの会計方式はヴェネチアのそれよりも進んでおり、自分はヴェネチアで勉強する必要がなかったという。シュワルツはヤコブの会計方式を本にまとめて出版し、これは当時のドイツで標準的専門書となったという⁴⁶。

これによりヤコブはより多くの時間を公益活動に傾注できるようになった。この頃からヤコブはフッゲライ建設の準備を始める。

9. フッガー家の衰退⁴⁷

ヤコブは1525年に死去した。その甥アントンが四代目として承継した。16世紀中期における

⁴⁵ Ogger, p. 71. Max Jansenからの引用。

⁴⁶ Ogger, pp. 177-178.

⁴⁷ 正式名はFürstlich und Gräfllich Fuggersche Stiftungen, フッガー侯爵・伯爵財団。

資本金は500万～600万ギルデンに達したが、16世紀末までの50年間に於いてアントンとその息子の努力にもかかわらず資本金の成長率は低迷し、17世紀の中期において残った財産は土地と城などの不動産のみとなった。アントンは慎重な性格で、従来の事業拡大には消極的であり、土地所有への投資を優先した。その理由は貸付金の返済の滞りである。返済は様々な理由により遅延し、とりわけスペインからの支払いは難航した。この問題は既にヤコブの生前に生じており、ヤコブはカール五世に「皇帝は私の援助なしにはローマ皇帝の地位につくことができなかったことは明らかである」とする督促状を送付した。この行為はヤコブの君主に対する対等あるいはそれ以上の力関係を象徴する挿話として有名である。ヤコブは気前の良さを示すため借用書を暖炉の火に投げ込んだとする話が絵画化されたが、史実ではない。

1570年代以降カール五世の子であるスペイン王フェリペ二世はスペインの版図を「日の沈まない国」と言われる程に拡大したが、財政状況は国内産業の基盤を欠いたため度重なる増税にもかかわらず不安定を極めた。さらにカトリックとしての不寛容な政策はオランダのプロテスタントによる独立戦争を誘発した。さらにフッガー家にとりアウクスブルクと並ぶ金融業の主要拠点であったアントヴェルベンがオランダの独立戦争に際してスペインの攻撃により1585年陥落し、衰退した。

1594年から1600年までがフッガー家は最後の利益57万5397ギルデンを計上したが、その後は1607年の3度目のスペイン国家財政の破綻により貸付金325万ギルデンを失う。フッガー家はほとんどの自己資本と他人資本により破綻を回避しようとした。しかし取付け騒ぎが生じたが、フェリペ三世によるモラトリアム発令により最悪を逃れた。その後においてもフッガー家はスペイン王家に800万ギルデンの債権を有していたが、1607年にも返済する意思がなかった。エーレンベルクによれば、これによりフッガー家は過去100年間の利益をすべて失った、としても間違いではなかろうとする⁴⁸。かくしてフッガー家はスペイン王室と衰退の運命を共にすることとなった。30年戦争の終了した1648年フッガー家の名前はヴェネチアのドイツ商館の記録から消えた。

結 論

フッガー家の資本金、貸付金、現金などの動産はすべて失われた。その後30年戦争、ペストの大流行、ナポレオン戦争、普仏戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦などの多くの試練を乗り越えフッゲライは残った。資本金のわずか1%程度の費用により建造されたフッゲライが500年存続し、フッガーの名前を今日まで伝えているとはヤコブは思ったであろうか。公益活動はその金銭的支出額に関わらず不滅の生命を有し、実施者を讃える。

引 用 文 献

- Bornkamm, Karin & Gerhard Ebeling (Hrsg.). *Martin Luther – Aufbruch zur Reformation*, Insel Verlag, 1982, 1995.
Dictionnaire Hachette, Hachette, 1980.
dtv Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1982, 1990.
 Duden. *Aussprachewörterbuch*, Bibliographisches Institut, 2005.

⁴⁸ Ogger, p.336に引用。

- Ehrenberg, Richard. *Das Zeitalter der Fugger*, Erster Band: Die Geldmächte, 1896, 1911.
 Ehrenamtliches Engagement seit knapp 500 Jahren, *Stiftung*, Sonderausgabe März, 2010, pp.64-65.
 Häberlein, Mark. *Die Fugger, Geschichte einer Augsburger Familie*, Kohlhammer, 2006.
 Herre, Franz. *Die Fugger in ihrer Zeit*, Wißner-Verlag, 1985, 13. Auflage, 2009.
 Jansen, Max. *Die Anfänger der Fugger*, 1907, 2011.
 Klüger Martin. *Die Bank der Fugger*, Hrsg. Fürst Fugger Privatbank, 2011.
 Luther, Martin. *An Den Christlichen Adel Deutscher Nation: Von Des Christlichen Standes Besserung, 1520*: in Karin Bornkamm, *Martin Luther, Aufbruch Zur Reformation*, 1995, pp.233-234. 印具徹訳「ドイツ国民のキリスト教貴族に告ぐーキリスト教の地位向上について」ルター著作集第1集第2巻, 聖文舎, 1971, 1981, pp.193-324.
 Luther, Martin. Von Kaufhandlung und wucher, 1524 松田智雄・魚住昌良訳『商取引と高利について』, ルター著作集, 第1集第5巻, 聖文舎, 1967, 1981, pp.495-589.
 Mckensen, *3876 Vornamen*, Südwest, 1969.
 Ogger, Günter. *Kauf dir einen Kaiser. Die Geschichte der Fugger*, Knauer, 1979.
 Parks, Tim. *Medici Money*, 2005, 北代美和子訳「メディチ・マネー」白水社, 2007, 2008.
 Pölnitz, Götz Freiherr von, Fugger, Jakob der Reiche, in: *Neue Deutsche Biographie* 5, 1961.
 Renouard, Yves. *Les hommes d'affaires italiens du moyen age*, Arman Colin, 1968.
 Voltaire, Essai sur les Moeurs et l'Esprit des Nations, 1756 in *Voltaire, Oeuvres complètes*, t. 11. Chapitre LXX De l'empereur Charles IV, De la bulle d'or etc., pp.414-417, Hachette, 1866-69.
- 五十嵐喬『欧州商業史』御茶の水書房, 1972年, 1976.
 石川純治・齋藤正章『社会のなかの会計』放送大学教育振興会, 2012年.
 大塚久雄『宗教改革と近代社会』みすず書房, 1984, 1995.
 大塚久雄『欧州経済史』岩波書店, 1956, 1965.
 齋藤寛海『イタリア史』第5章 二つのイタリア 北原敦編, 山川出版社, 2008年.
 シオヴァロ, フランチェスコ; ジェラルド・ベシエール; 鈴木宣明訳『ローマ教皇』創元社, 1995年.
 清水廣一郎『中世商人の世界』平凡社, 1982年.
 諸田 實『フッガー家の遺産』有斐閣, 1989年.
 渡辺 茂『宗教改革期におけるドイツの貨幣, 度量衡の単位について; ルター著作集, 第1集第2巻, 1963, 1981, pp.477-488.
 吉森 賢『企業家精神衰退の研究』東洋経済新報社, 1989年.

〔よしもり まさる 横浜国立大学名誉教授〕

〔2012年10月11日受理〕